

## 義と認められたのは

(ルカ18・9～14)

## 一、イエスが語られたことば

歴史上のイエスが、実際に語られたことばが記されています。それを福音書記者が取り上げて、福音書の中に織り込んでいます。ということは、主イエスが語られた話と福音書記者による解説を分けたり、よりオリジナルの話に肉薄して行くことができるわけです。

9節をご覧ください。〈自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに、イエスはこのようなたとえを話された。〉とあります。これは、福音書記者ルカによる解説のことばです。ルカは10節から14節までの、主イエスが語られた話を〈自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに〉教え諭すために語られた「たとえ」として、織り込んでいます。

ちなみに14節後半は、主イエスが語られたことばとして記されています。原文においても14節は一つの文章になっていますが、それはルカによる編集によるものです。このまとめりにおいて、主イエスが語られたのは、14節前半までであると受け取りますと、主が語られたことの意味がはっきり見えてきて、適用範囲も広がります。

## 二、主イエスのことばに聞く

そういうわけで、この朝は9節を削り、14節の後半部分も削って、かなりスリムになった主イエスの話に、耳を傾けてみたいと思います。

10節をご覧ください。〈二人の人が祈るために宮に上って行った。一人はパリサイ人で、もう一人は取税人であった。〉とあります。これを、主イエスによる作り話(たとえ)ではなく、実際に目撃した話として読みますと、非常に現実味が出てまいります。パリサイ人はイエス時代のユダヤ人の中で、神の御意思が記されている律法、すなわち聖書に添って生きて行きたいと願っていた一派でした。彼らは勤勉で、質素を旨として生きていました。一方の取税人は、ユダヤ人でありながら敵国ローマの手先になってローマ帝国への税金を集めて、ローマに納める務めを担っていました。取税人というと、聖書から余り悪いイメージを思い描かないかも知れません。それは、主イエスの弟子になったレビ(マタイ)、ザアカイ、きよの聖書箇所が登場する取税人、あるいはイエスと一緒に食べたり飲んだりしていた取税人のことを思い描くからです。ですが平均的な取税人は、相当な悪者が多かったと思われる。そういう取税人とパリサイ人の二人が、祈るために宮(神殿)に上って行きました。

パリサイ人は祈りました。11節、12節です。〈パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』と。パリサイ人の祈りは、自分の正しさを誇る祈りでした。自分の義を打ち立てている祈りでした。

一方の取税人はどうだったでしょうか。13節です。〈一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』とあります。取税人は、人間関係で行き詰まっていたのかも知れません。仲間から裏切られたのかも知れません。何があったのか、私共には知る由もありません。ただ非常に感傷的になっていました。ですから、神殿に上って行ったものの、遠く離れた場所に立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言ったのです。『神様、罪人の私をあわれんでください』と。すると何が起きたでしょう。14節前半です。〈あなたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。〉とあります。

〈義〉とは「正しさ」のことです。ところが、「正しさ」≡「義」がくせもの

でして、人々がそれぞれに「義」を持ち出したら、持ち出した人数分の「義」があると、言っても過言ではありません。イザヤ書に〈イザヤ53・6私たちはみな、羊のようになまよひ、それぞれ自分勝手な道に向かつて行った。〉とありますが、そのような姿です。しかし神の義、すなわち神が示される義(≡正しさ)は一つです。決してブレません。その義はイエス・キリストに現れているというのが、聖書の語ることばの中心です。そういうわけで、この取税人は義とされましたが、すなわち神に受け入れられました。その論拠はどこにあるのかといえ、イエス・キリストによる贖いの死にあるわけです。主イエス・キリストは、ご自身を通して成される贖いのわざを先取りして、この話を語られたわけです。

## 三、神と出会う場所

この、パリサイ人と取税人のケースから教えられることがあります。それは、人は「これをやった。あれをやった」と自負している間は、神と出会うことはむずかしいことです。反対に、人生におけるどん底は、神に出会う場所となります。どん底そのものを歓迎する必要はありません。そうではなくて、自分(自分たち)として、不可抗力によってどん底に落ちてしまったとき、そこが神と出会う場所になります。